８．伝染性胃腸炎発生農場での通常出荷復帰への取り組み事例

玖珠家畜保健衛生所・[1)]大分家畜保健衛生所
〇安藤紀子・山﨑窓・井上一之・羽田野昭・病鑑　平松香菜恵[1)]・病鑑　河上友[1)]

【はじめに】伝染性胃腸炎(TGE)は、嘔吐、水様下痢を主徴とするウイルス性の急性伝染病であり、国内では2016年に沖縄県の発生以来発生がなかったが、2019年3月に本県において発生した。昨今、TGE発生時には豚流行性下痢防疫マニュアルに準じた防疫措置等を講じるなか、今回新たに通常出荷復帰への取り組みを講じたので、その概要を報告する。
【発生概要】発生農場は、母豚800頭規模の繁殖・肥育一貫経営農場であり、2019年3月21日に分娩舎の哺乳豚に激しい水様性下痢が発生。3月26日に当所へ検査依頼があり、死亡哺乳豚３頭と鑑定殺1頭について病性鑑定を実施し、3月28日にTGEと確定診断した。
【浸潤状況調査と結果】同年3月28日に全肉豚舎の糞便を用いてTGEウィルス（TGEV)の遺伝子検索を実施したが、TGEV特異的遺伝子は検出されなかった。その後4月4日に各ステージの豚舎の糞便と血清を用いて、遺伝子検索と抗体検査を実施したところ、下痢症状を呈した哺乳豚２頭と症状を呈していない120日齢の肥育豚1頭からTGEV特異的遺伝子が検出された。また、分娩舎の複数の母豚で中和抗体価のばらつきがみられた。
【農場のまん延防止と防疫措置】
　農場に対し、哺乳豚の豚房間の移動の自粛、人・車両・資機材の消毒等まん延防止対策の徹底を指示した。また、出荷豚の食肉処理場への搬入時間制限及び入退場時の車両消毒を徹底する体制を整備した。さらに、4月7日に母豚・育成豚・種豚全頭にワクチンを接種するとともに適切なワクチン接種の指導をした。
【清浄性確認検査と結果】下痢による死亡豚を5月15日から2週間認めなかったことから、6月7日に各ステージの豚舎での糞便と消毒実施後の分娩舎の環境拭き取り材料を用いて遺伝子検索を実施した。その結果、分娩舎の１豚房でTGEV特異的遺伝子を検出した。また、約2週齢の哺乳豚とその母豚の血清を用いた抗体検査では、中和抗体価に大きなばらつきはなかった。その後9月25日に再度、清浄性確認検査で遺伝子が検出された分娩舎と隣接する分娩舎の糞便の遺伝子検索を実施し、すべての検体で陰性を確認した。
【通常出荷への再開基準の検討】清浄性確認検査の結果と臨床症状及び死亡頭数の有無から、通常出荷への再開基準は、下痢による死亡頭数が2週間以上認めず且つ肉豚舎でTGE陰性を確認するものとし、発生から77日後に食肉処理場への通常出荷を再開した。
【まとめ・考察】当該農場のTGEの症状は分娩舎で明瞭であり、肉豚舎ではほぼ認められなかった。発生当初の分娩舎の母豚の中和抗体価のばらつきから、適切なワクチン接種がされておらず、さらに分娩産子数の増加で、哺乳豚の移動が行われていたことがTGEのまん延に繋がったと推察された。的確なワクチン接種、豚舎や人・車両・資機材の消毒の徹底により、発生から48日後に沈静化した。今回は、症状ではなく下痢による死亡の有無及びTGE陰性を通常出荷再開基準とし、通常出荷を再開した。今後も飼養衛生管理基準の遵守の徹底や適切なワクチン接種を指導し、再発生の防止に努めていきたい。